慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トマス・モルナー著『サルトル：現代のイデオローグ』
Sub Title	T. Molar, Sartre : Ideologue of our time
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.8 (1969. 8) ,p.125- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690815-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Thomas Molnar,
Sartre: Ideologue of Our Time
New York, Funk & Wagnalls, 1968, 143 pp.

トマス・モルナー著

『サルトル——現代のイデオローグ』

マルクス主義の欠乏症 (la carence du Marxism) に対して、マルクスの名において新しいユートピアを、人間の《人間的次元》の復権を主張する若きマルクス主義者たちの群れを、われわれは見る。彼らの思想には実存主義の影響が顕著だ。マルクス主義と実存主義との出逢い、それは一時的な灼熱現象なのだろうか。その主導者は、言うまでもなく、ジャン＝ポール・サルトルである。現在の彼は、実存主義も一個のイデオロギーとみなし、マルクス主義の全体化運動に解消されるべきものと考えている(『方法の問題』)。このようなサルトルの思想的メタモルフォーゼは、果してその必然性があるのかどうか。トマス・モルナーの本書は、手のこんだサルトル哲学の世界の内的論理を鋭くえぐる。網羅的な方法によるのではなく、ひとつの明確な目的を持つて。

サルトルは偉大な哲学者ではなく、重要な作家でも、社会の予言者でもない。だが、彼は時代の証人、le contemporain capital の役割を演じている。われわれは、彼が現代の人間の状況と世界とを超越しようと試みる点で、その思想に深い霊感を覚えるのである。ヘーゲルおよびドイツ・ロマン主義の世代にはじまる内在性の哲学の帰結を、モルナーはサルトル流のマルクス主義に認める。この哲学は、現実を《過程》もしくは《運動》として把える。そして、人間は本質を所有するのではなく、本質を自己実現すべきものなのである。永遠の流動のなかにいる人間は、時間における絶対性を求める。その過程が歴史であり、進化である。内在性の哲学者は、ヘーゲルであれマルクスであれ、歴史の方向性を透視し、その弁証法的運動の転換点に立とうとする。しかも彼らの課題は、歴史的真理を啓示するだけでなく、行動によつてそれを実現することとされる。

サルトル自身はブルジョワであることをよく知つている。彼の実際の生活態度(シモーヌ・ド・ボーヴォワールとともに)にもかかわらず、みずからの階級的な紐帯を断ち切ろうとする。言葉を媒介として状況にかかわること、それが哲学者＝作家の義務である。『言葉』の終り近くに、「相変わらず私は書いているのだ。ほかになにをしたらよいのか？……いま私は、私たちの無力を知つている。それはそれでよい。私は本をつくつているし、これからもつくるだろう。それは必要なことだ」とサルトルは言う。書くことは、まさにブル

ジョワ的良心の疼しさであり、それから離脱することだ。サルトルにとつて、ブルジョワたることは虚偽の意識（*falsche Bewusstsein*）であつて、それゆえに敢えて反ブルジョワ的私生児たらんとする。モルナーは、ちようどボードレールとオーピック将軍との関係のように、サルトルの母方の義父シャルル・シュヴァイッエルが彼からまだうら若き、美しい母を奪い去られた憎悪感を指摘している。シャルルこそ恭々しきブルジョワなのだ。

サルトルは、ブルジョワ社会の現存する一切のものを憎む。そして、われわれが顔をそむけるような現実をわざと選ぶ。例えば、ジアン・ジュネの生き方だ。捨て児である彼は、幼い頃から盗みを覚え、感化院に入れられて脱走し、犯罪生活を求める。彼の盗みや男色は、まさに《自由な》行為である。善・悪の区別はブルジョワ社会における韜晦にすぎない。サルトルは、従来悪といわれたものを肯定し、善といわれたものを断罪する。価値は主観的実存によつて創造される、という彼の論理は知的不正直ではないか。もしもジュネがソヴェト社会で盗みを働いたら、サルトルは何と言うのか。ブルジョワ社会では人間は不自由であり、新しい状況においては自由な選択などありえない、否、自由に強制されている、ということになろうか。

ミシェル＝アントワーヌ・ビュルニェによれば、サルトルは『存在と無』につづくはずであつた道徳論を書くことを放棄し、経済学と精神分析、人類の歴史と個人の歴史に関心を寄せるようになつた。「道徳的態度は技術的・社会的条件が積極的行動を不可能にするとき姿を現わすものだ」と確信するようになつたからである（『実存主義と政治』）。一九四五年以降、サルトルがマルクス主義に接近するまでは多年の躊躇逡巡があつたが、『弁証法的理性批判』でサルトルは理論的に屈服する。

マルクス主義の力と富とを成すものは、それが歴史的過程をその全体性において明らかにするための根本的な試みであつたということであり、マルクス主義はわれわれの時代の哲学としてとどまり、それを生んだ状況はいまだのり越えられていない、とサルトルは主張する。だが、モルナーによれば、サルトルの実存主義は、結局マルクス主義的解決に惹かれざるを得ない。人間的実存あるいは意識（pour-soi）の暗澹たる葛藤、不毛な受難は超越的存在に向うことができず、自由―実践（プラクシス）によつて世界と一体化する。かくして、主観と客観、個人と全体性とは融け合つて救済される。en-soi-pour-soi は歴史そのもののなかではじめて安住する。そのような哲学とは何か？サルトルにとつては、解放された個人より成る階級なき社会、普遍的階級の共同体のために世界変革を行うマルクス主義以外にない。

ところで、サルトルの描く理想的人間は共産主義知識人である。しかし、共産党に参加するかしないかというディレンマは、絶えず彼の作品に現われる、『自由への道』のマチュ・ドラリュのように。サルトルは、党の外側にいる自由な批判者としてとどまつている。五〇年代には、ソヴェト、東欧をはじめ、中国、キューバ、アフリカなどの巡礼者であつた彼は、六〇年代にはソヴェト、ヨーロッパ諸国の共産党に失望し、むしろ中国、アフリカ、アラブの第三世界

におけるプロレタリア以下の人間に革命の可能性を期待し、テロル、暴力、ゲリラによる共産主義の急進的蘇り（re-radicalize）の必要性を強調している。

モルナーが言うように、一九五〇年代の末、サルトルがポーランドの知識人と学生に対して、マルクス主義の真理性を講演した頃に、彼らはマルクス主義から離反し、実存主義の方向に移行していつたことは皮肉である。事実、サルトルをマルクス主義者と呼べるのかどうか問題である――少なくとも正統的マルクス主義者は反対するであろう。モルナーは、サルトルのマルクス主義、あるいはマルクス主義的実存主義は、ルカーチとかシアフ、ブロッホなどと同一範疇に属するエピゴーネンの一人だ、としている。マルクス主義の内部に人間を回復させ、具体的な人間学を提示しようとするサルトルの意図には、歴史決定論への鋭い対位法があり、同時に、《革命的ヒューマニズム》が漂つているけれども、彼の語りかけが心ならずも、イデオロギーの空しいパロディに沈み、エロス的陶酔に堕さないためには、モルナーのつぎの批判的な言葉がつねに銘記されねばならない。

「われわれは、サルトル的思想体系は、すべての内在論的体系と同じように、哲学的前提として葛藤のうえに繁茂する、ということを認識せねばならない。サルトルその他類似の思想家たちが、同時代人によつてペシミストだと呼ばれないとすれば、それは、耐え難き現在についての彼らの暗闇の叙述が、燦然たる状況を未来へ投企することによつて救済されているかに見えるからだ。まさに単純な分析は、正直に誠意をもつてなされていても、投企自体が保証されないことを示すのが常である。投企された未来は現在となんら連続性がないからだ。それは、歴史的経験と人間性についての合理的評価とに基礎を置いた未来ではなく、存在論的な変化の可能性にもとづいた、ユートピアの無根拠な肯定なのである。ユートピアの利点からみれば、ペシミスト的とか、反進歩的とか呼ばれたり、愛情に欠けているというような危険を冒さずに現存する一切のものが侵食的な批判をこうむられるのである」。

（奈良　和重）

慶應義塾大学商法研究会訳

『西独株式法』

――『西独株式法』の比較法的展望――

目次

一、はしがき
二、参考文献
三、改正法の内容概観
(1)沿革　(2)無額面株式の不採用　(3)株式の最低額　(4)発起人の数
(5)最低資本金額　(6)株券の発行　(7)株式の移転　(8)取締役会　(9)取